



- 体育会名：関西学院大学体育会カヌー部
 - 創部年：1958年(昭和33年)
 - 2025年度会員数：52人(4年10人、3年10人、2年13人、1年19人)
-
- 同窓倶楽部名：関西学院大学体育会カヌー部同窓倶楽部
 - * 関西学院同窓会 公認団体
 - 同窓倶楽部通称：漕月会
 - 設立年：不詳
 - 会員数：514人(男性360人、女性154人)
 - * 物故者含む
-

<岸弘之輔の“壮大な夢”>

高度経済成長期真っ只中の1958(昭和33)年、この年こそが今の常勝関学カヌー部の発端となった記念すべき年といえよう。当時カヌーと言えば、アフリカ先住民が乗る船ぐらいにしか一般的に知られていない時代であり、競技として活動していたのは大正大と専修大くらいで、全くマイナーなスポーツであった。しかし、とある男子学生が、ひょんなことからカヌーが64年東京五輪の正式競技になり得ると知るや、若くバイタリティ溢れる彼は「関学からカヌーのオリンピック選手を出す」という壮大な夢を抱き、実現するため、友人を集め同好会を設立するために動き始めたのであった。

この学生こそが関学カヌー部誕生の祖、岸弘之輔である。岸は大正大OBやカヌーの先人達とコンタクトを取るうちに、『36年ベルリン五輪に参加した日本ボート選手団が、次回開催が予定されていた40年東京五輪(戦争で中止)に備えてシベリア鉄道経由でカヌー(カヤック)を持ちかえり、そのカヌーをサンプルにして製造された国産カヌーの1艇が西宮市香栢園のスカルハウスに預けてある』という情報を掴むまでに至り、さらにその艇を借り受けることに成功した。唯一2人乗りカヤック1艇ではあるが、正に関学カヌーチームにとって大きな大きな第一歩を踏み出した瞬間であった。

<同好会から“部”へ>

岸はじめ創設メンバーの努力もあり、関学カヌー同好会の出足は順調だった。59年入学組の坂根徹・阪本宗三郎ペアは翌年の日本選手権で初出場・初優勝を飾り、その勢いのまま61年の同大会でも連覇した。64年には古沢正男が五輪最終選抜レースに出場し、惜しくも

代表の切符は得られなかったものの、「関学からオリンピック選手輩出」という岸の夢の一步手前までたどり着くことができたのだ。

当時の快進撃を支えたのは、トレーニング方法をはじめとして指導を全面的にバックアップした京大、日本カヌー連盟が招請したデンマークのクリステンセンコーチなど、当時日本国内でのカヌー経験者がほとんどいない中、関学以外からの力も大きかった。入部当時は細長い身体だった新入生たちは皆、厳しい練習環境のなかで次第に肌が黒くなり、筋肉質なスポーツマンへと変貌していくほどであったという。

64年、ついに記念すべき第1回全日本学生カヌー選手権男子総合部門で初優勝を勝ち取り、カヌー同好会は『体育会カヌークラブ』へ昇格を果たした。そして広井滋弘、中村信を主将副将に据えた67年の全日本学生選手権で2度目の全国制覇を果たし、68年、とうとう悲願の関学『カヌー部』が誕生することとなる。

<不滅の金字塔 インカレ総合2連覇>

72年、関学史上今も記録が破られていない『2年連続総合・全国制覇』、それもカヤック部門のみでの総合優勝という偉業が達成された。その立役者となったのが、当時の主将・紅林健である。69年に入学した紅林は、2年時に関西大会500m、1,000m共に優勝すると、3年時には関西はおろかインカレの頂点に立ち、4年時にも王者の風格を示すインカレ連覇を果たした。『紅林、目下全日本に敵なし』と謳った当時の関学スポーツの記事が決して過言ではないことが戦績からも分かるであろう。紅林が火を付けた西の雄・関学は、70～75年の間に『関西6連覇』という大記録を打ち立て、50年経った現在でさえ語り継がれる、まさに黄金期と呼ぶに相応しい時代を迎えることとなった。

<関学から世界へ>

紅林が主将を務めていた72年の春、尾崎茂夫と柏原基継がカヌー一部の門を叩いた。初心者ながら厳しい練習で強くなり、めきめきと頭角を現した2人は、1年時からペアを組み、73年のインカレ10,000mで優勝。翌74年には世界選手権派遣選考会となった全日本選手権で、1,000m・10,000mの2種目に優勝し、その成果が評価され、関学史上初となる世界選

手権メキシコ大会出場を果たした。

結果的には、基礎体力だけでなく練習方法・漕法も全く異なる海外勢を相手に予選敗退となったものの、「関学カヌー部から世界に羽ばたけるのだ！」という、かつてない程の希望がもたらされた。尾崎は4年時にも日本代表としてユーゴスラビア大会に出場し、大経大OBの丸山一二氏とのペアで善戦した。

尾崎・柏原の両名や、10,000mを制した主将の石田洋三らの活躍で74年、まだ第10回のインカレにも関わらず、関学にとってはもう5度目となる全国制覇を手にした。その強さは、それまで長い間優勢を保ってきた関東勢をして「関西恐るべし」と言わしめるほどであった。

<苦難の時代>

尾崎・柏原が抜けた後は、全日本選手権で松下優司・塚本敬のペアが10,000mを2連覇(75・76年)するなど活躍したが、以降は全国の頂点から遠のく時代が長く続くこととなった。

時を同じくして、関学カヌー部にとって不幸な出来事が続いた。79年には関西選手権のレース中に清長登志雄選手が転覆後帰らぬ人となるという痛恨の事故が起き、深い悲しみに包まれた。また翌80年には、不法侵入者による不審火で武庫川西岸にあった艇庫が火事になり、艇庫と艇のほとんどを焼失するという事件が起きた。

当時の部員やOB達は、2度の悲運にもめげず、復活に闘志を燃やし、多方面からの援助もあって西宮浜に艇庫を移転して艇も確保することができ、何とか再興への道が開かれたのであった。

<長いトンネル・過渡期>

81年から90年代にかけて、単発ながら毎年のように個人での関西制覇は果たされたが、団体や全国レベルでの頂点は遠かった。長いトンネルに入った後は、主要大会で散発的に表彰台に上がるという時代が続いた。

雌伏の期間ではあったが、その間にカナディアン部門の創設(82年～86年)、兵庫県立海洋体育館への艇庫移転(91年)、スポーツ推薦枠の獲得(94年)、女子部創設(97年)など、現在へとつながる土台がこの頃に築かれたのも事実である。チーム状況や周囲の環境も、

徐々にではあるが復活に向け動いていた過渡期であると言える。

<復活・常勝の時代>

99年、実に24年という長い歳月を経て、関西大会の優勝杯が関学の元へ戻ってきた。『常勝関学カヌー部』復活の最大の原動力である丸山一馬を欠いての優勝でもあり、主将の中井丈晴やエースの小林一大ら幹部学年の並々ならぬ執念が、見事に関西大会での圧勝を引き寄せた。同年イタリアでの世界選手権に出場して関西・全国大会では不在だった丸山は、翌年には主将・庄賀寿の下、関西2連覇の原動力となった。それらの経験を活かしさらにチームを盤石に変えていき、主将として迎えた2001年には千葉県黒部川で行われたインカレで、ついに全国旗を奪還する。丸山と弟・良平兄弟や10,000mを制した加藤邦浩らの活躍で成し遂げた優勝は、実に27年ぶりのことであった。

02年、丸山良平がスペインでの世界選手権出場に加え、アジア選手権(イラン大会)200mペア、ワールドカップ500m・200mで優勝を勝ち取るなど、丸山兄弟の活躍は日本カヌー界において目を見張るものがあった。03年、丸山良平率いるチームが全国制覇を達成、7度目の栄冠を手にする。丸山兄弟が確固たる礎をつくった関学カヌー部は、ここから正真正銘『常勝』チームへと変貌を遂げていくこととなる。

<女子部の躍動>

5年間で3度の関西制覇、2度の全国制覇を遂げ再び軌道に乗り出したカヌー部は、丸山兄弟以降、毎年10人以上は入部するような大型クラブへと変化していく。08年には、松本直子女子リーダー率いる女子部が、創部初となる全国制覇を成し遂げ、男子女子共に全国屈指のカヌーチームとして申し分ない成績を残す。そして遂に、11年には関学体育会史上初の『男女同時全国制覇』を成し遂げるまでに至った。その後女子部は、15・16年に東出千穂、西村みらいの活躍もあり、関西・全国ともに連覇(関西においては17年・18年も合わせ4連覇)を達成する。女子部創設約20年にして学生女子カヌー界の強豪チームへと躍進した。女子部には新たにカナディアン部門も創設され(17年)、更に勢いを増すことが期待される。

<令和、関学から世界へ>

20年以降は、長距離選手権世界大会への出場者を多数輩出する。小鍵彰人(21年)、谷口慶・久保山慶太郎(22年)、辻航大・久保山・近藤燎・馬場ゆき・酒井遥青・橋本茉音(23年)、馬場・保田佳乃(24年)が、それぞれ世界大会へ出場し、大舞台での経験を積む。馬場は関学女子カナディアン部門として初めて世界大会出場を果たす。

OB・OGの活躍も目覚ましく、ともに23年卒の酒井悠弦と細見茉弥、25年卒の馬場は、大学卒業後も日本代表として世界を舞台に活躍中である。細見は24年に行われたアジア選手権(オリンピック最終選考レース)に出場、惜しくもパリ五輪出場権は得られなかったが、五輪出場まであと一步のところまで来ている。酒井も「関学カヌー部からオリンピックへ」を実現させるべく、25年に日本代表としてワールドカップ2大会(ポズナン、ミラノ)に出場している。

<“全国制覇”という目標は遠いか>

25年、創設67年を経て、全日本インカレ団体制覇14度(男子9、女子5)、関西インカレ団体制覇24度(男子17、女子7)を数え、那須杯4度、池内杯4度の受賞を誇るまでになった。しかし近年は、男子は11年、女子は16年を最後に全国制覇という目標は達成されていない。大会ルールの改訂や他大学の戦力補強など、全国制覇への道のりがより険しくなっていることは事実だが、決して諦めることなく、ひたむきに全国制覇という目標に向かって突き進んでほしい。

再び『男子女子共に関西・全国制覇＝完全制覇』を目指す関学カヌー部だが、練習環境や設備面の問題も少なくない。多くの他大学が有している自艇庫が無く、兵庫県立海洋体育館のスペースを間借りしており、自前の艇庫を建設できていないことや、艇の老朽化と資金不足等、課題はまだまだある。関学カヌー部が再び全国に君臨し、本当の意味で日本を代表するクラブになるために必要なのは、これから更に時間をかけて試行錯誤を繰り返し、在りし日の岸弘之輔の情熱を皆が持ち続けることに他ならない。

カヌー部 部史 編集担当者 風岡圭太(H18 総合政策学部)

(執筆者不明のカヌー部史をこの度追記等編集いたしました。執筆いただいた方へ感謝申し上げます。)